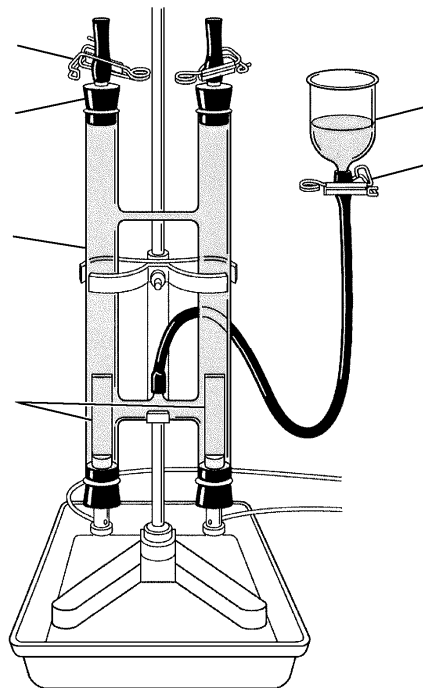


2年理科 課題プリント①(電気分解装置の使い方)

2年の教科書 p.134 を参考に、空欄をうめ、操作の手順を覚えましょう。

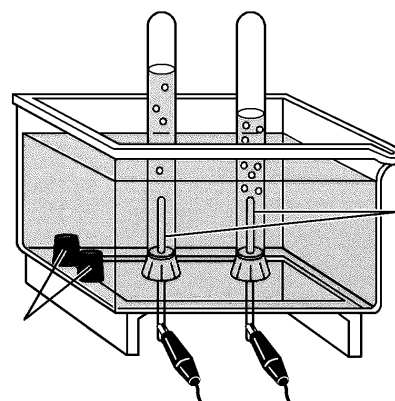
簡易型電気分解装置の使い方

- ① 装置上部の2つの穴に()をさしこんだ後、装置を前に倒し、背面からろうとで、分解する水溶液を入れる。
- ② 装置の前面を水溶液で満たし、()が残らないように装置を立てる。
- ③ 電極と電源装置、または乾電池を導線につなぎ、電流を通す。
- ④ 気体がたまったら、電源を切ってから、ゴム栓をとって気体が何であるかを調べる。



H字管電気分解装置の使い方

- ① ゴム栓の上部の()と液だめのピンチコックをすべて開く。
- ② 分解する水溶液を()から入れ、H字管内に空気が入らないように水溶液で満たす。
- ③ ゴム栓の上部のピンチコックを閉じる。
- ④ 電極と、電源装置または乾電池を導線につなぎ、電流を通す。
- ⑤ 気体がたまったら、電源を切る。その後に液だめのピンチコックを閉じてから、ゴム栓をとって気体が何であるかを調べる。



試験管と水そうを用いた電気分解装置の使い方

- ① 水そうに分解する水溶液を満たし、試験管ばさみを用いて試験管をその中に沈める。このとき試験管の中の()をぬいておく。
- ② 試験管ばさみを用いて試験管を立てて、図のように、()にさしこむ。
- ③ 電極と、電源装置または乾電池を導線につなぎ、電流を通す。
- ④ 気体がたまったら、電源を切ってから、試験管にゴム栓をはめて水溶液からとり出し、試験管の外側を水でよく洗う。
- ⑤ ゴム栓をとって気体が何であるかを調べる。

2年理科 課題プリント②(グラフの書き方)

1年の教科書 p.164 を参考に、空欄をうめ、手順を確認しましょう。

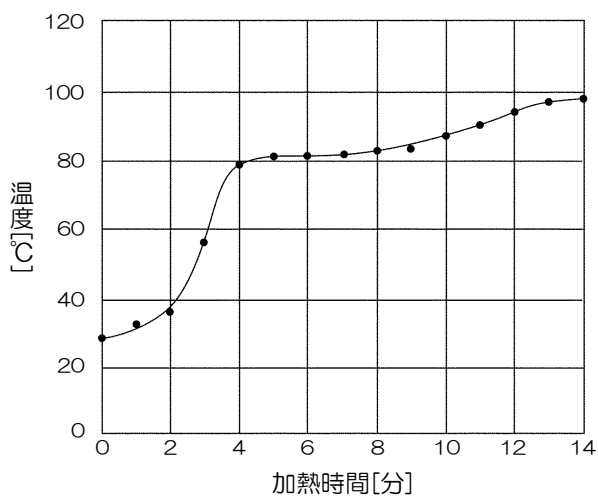
グラフのかき方

- (1) ()には実験で変化させた量を取り、()には変化した量を取り、各軸のそばにその名称をかく。
- (2) 測定した()の値がかきこめるように、1目盛りの大きさを決め、横軸と縦軸に目盛りをつけ、量の単位をかく。
- (3) ()を点(・)ではっきりと正確に記入し、点の()を見て、()か()か判断する。
- (4) 曲線と判断したときは、なるべく多くの点の上やその近くを通る()曲線を引く。
- (5) 直線と判断したときは、()を通るかどうかを考えて、ものさしの辺の上下に点が同程度に散らばるように直線を引く。

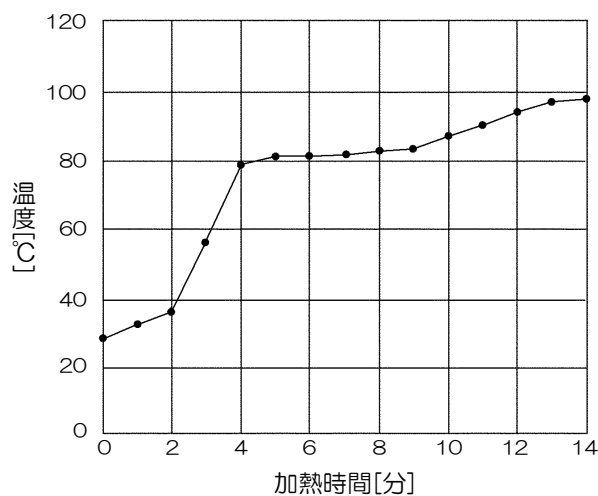
誤差

測定する際、真の値に対して、測定値がわずかにずれてしまう。このずれ(真の値と測定値の差)を()という。誤差を小さくするには、くり返し測定をして、明らかにはずれた値を除いて、平均をとるなどの方法が有効である。

○



×

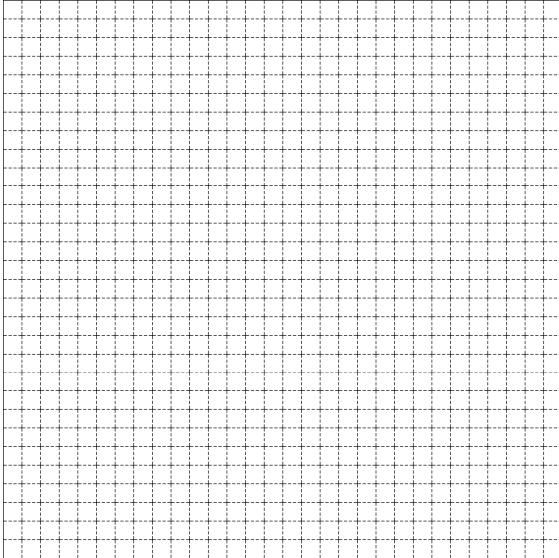


2年理科 課題プリント③(グラフの作成)

1年の教科書 p.164 を参考に、グラフを作成してみましょう。

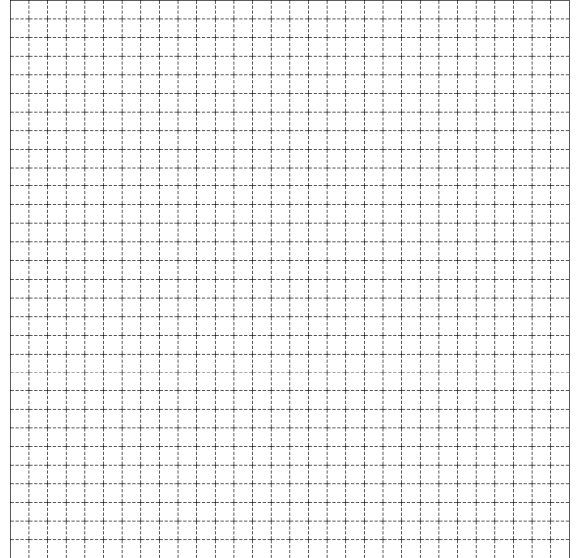
①

力の大きさ[N]	0	3	6	9	12	15
ばねの伸び[cm]	0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0



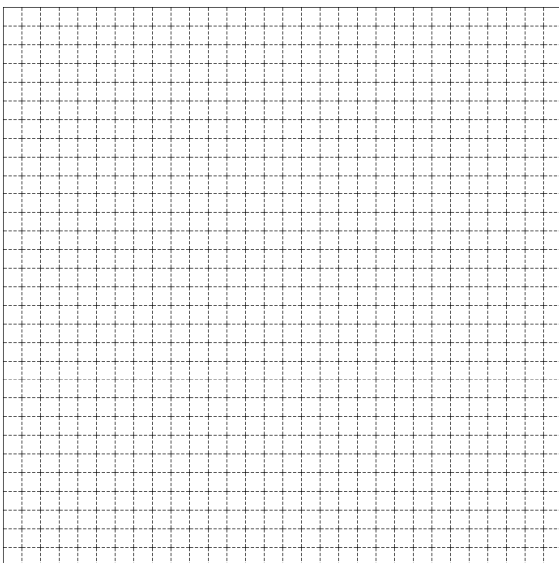
②

力の大きさ[N]	0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5
ばねの伸び[cm]	0	0.4	1.0	1.6	2.0	2.5



③

力の大きさ[N]	0	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5
ばねの伸び[cm]	0	2.0	3.9	6.0	8.1	9.9



④

力の大きさ[N]	0	1.5	3.0	4.5	6.0	7.5
ばねの伸び[cm]	0	2.0	4.1	5.9	8.2	10.0

